シノドスと歎異抄

篠田克巳

「ともに歩む教会のために」をテーマに開催されたシノドスは「神が期待されている第三千年期の教会のあり姿」を「霊による対話を基本とした傾聴」により識別された「神の民への手紙」を発表し閉幕しました。この手紙には具体的アクション内容は記載されておらず 2024 年 10 月の第二会期までの期間、各小教区がまた一人ひとりが置かれた立場において具体的に関わるように求められています。
具体的にかかわるためには「聴くこと」「霊による対話」をとおして「識別すること」が重要であることも今回のシノドスで確認されました。
ここ唐崎教会でも地域性、メンバー構成等を考慮した小教区の独自性を生かした『宣教』が求められます。唐崎教会の独自性とは何でしょうか。唐崎教会は比叡山の麓に位置し、ガリラヤ湖にも似た琵琶湖に面した立地条件にあり、地域的・文化的にも比叡山と深く繋がっています。

比叡山は日本仏教の名僧を創出した「お山」であり、親鸞聖人もそのお一人です。
親鸞聖人といえば『歎異抄』で、歎異抄に聴くことは日本人文化に息づく「絶対者に対する畏敬の念」に繋がりキリスト教が西洋の宗教から日本の宗教に生まれ変わる宣教の起点に繋がります。
そこで歎異抄、親鸞聖人について私なりに学ばせて頂いたことを少々記載させて頂き、新三千年期に向けた礎となればと思います。
結論としてはキリストの教えと歎異抄（親鸞聖人の教え）は非常によく似ている、同じといっても過言ではないでしょう。

日本の仏教は平安時代に最澄、空海が天台宗と真言宗を開宗したことで広まります。両者はともに中国の密教を学び「修行し悟りを得た者のみが救われる」という小乗仏教を唱えます。
親鸞聖人も比叡山で２０年間も修行し悟りを得ようとしましたが悟りに至らずお山を下り、法然聖人のもとで、日々の生活に追われ修行する事はもちろん毎日の食物すら手にできず、疫病に苦しみ飢饉に襲われ戦火で追われる貧しい庶民が救われるためにはどうすればよいかを模索した結果、「誰でも『南無阿弥陀仏』と唱えるだけで救われる」という大乗仏教の浄土真宗を開宗します。

『南無阿弥陀仏』とは「阿弥陀様に帰依します」「阿弥陀様の言うとおり」という意味です。
マリア様が受胎告知のとき「み言葉の通りこの身になりますように」と大天使ガブリエルに答え、イエス様がゲッセマネの園で「私の思いではなく、み旨のままになりますように」と祈られ、更にはマリア様がカナの婚姻で「あの方（イエス様）の言う通りにして下さい」と言われた絶対の信頼関係の姿と重なります。

歎異抄第三章には「善人なをもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」の有名な一節があります。
細かい説明は省きますが、この一節からからも[神よ、罪人である私を憐れんでください」（ルカ１８．１３）と祈った徴税人の姿が思い出されます。
更に一番重要なのが上記の通りの親鸞聖人の目線と「貧しい人々は幸いである。神の国はあなた方のものである。」（ルカ６．２０）と言われたキルストの目線とが完全に一致することです。

もちろん教義上の違いもありますし、阿弥陀様って何者？とか輪廻転生って何？天地創造の神とどう関係するの？とか疑問も多くありますが、輸入宗教である密教を日本人のＤＮＡに融合させて浄土真宗を生み出した日本文化に照らし見直し『聴くこと』も新たな『宣教』のヒントになるのではないでしょうか。

以上